

2 章

キャンパスの伸ばすべき個性と空間像

2-1. 豊中キャンパスの個性と空間像

豊中キャンパスは、多様な学生生活の活動と大阪大学の歴史の双方が感じられる、みどり豊かなキャンパスである。次頁の図 2.01a に伸ばすべき個性や空間像、および問題個所の読みとりを示し、継承すべき場所や風景とともに図 2.01b に示す。

全体共通の課題として以下のような点が挙げられ、これらは主にデザインガイドライン(8-3 節)で解決のための考え方を示すが、状況の変化に即した継続的な検討が必要であると考えられる。

- (1) 総合図書館など、街路に対して圧迫感を感じさせる建物がある
- (2) 歩車分離・融合が不明確な部分が多い
- (3) 駐輪があふれている
- (4) 植栽が過剰なほど茂り、街路に対して過剰に重層となって閉鎖感を与えている部分が多い
- (5) 建物入口部分に人を惹きつける工夫がほしい
- (6) 車で常時入構可能な出入口が正門のみであり、また石橋口・柴原口以外の運用方針が明確でない

2-2. 吹田キャンパスの個性と空間像

吹田キャンパスは敷地面積約 100ha を擁する広大なキャンパスで、各部局(学部・研究科や研究所など)の個性が表出し、近・現代的なデザインが主体となっているキャンパスである。北摂全体でみると吹田キャンパスの緑地は、広域の緑のネットワークの一部をなす重要な要素となっていることが判る。

図 2.02a に伸ばすべき個性や空間像、および問題個所の読みとりを示し、継承すべき場所や風景を図 2.02b に示す。

2-3. 箕面キャンパスの個性と空間像

箕面キャンパスは、箕面市船場東の箕面船場駅前土地区画整理事業地区内に造成開発され、2021年に箕面市粟生間谷から移転してきた。敷地面積は8,000㎡の都市型キャンパスで、豊中・吹田の両キャンパスの中間に位置し中之島とのアクセスも良いため、本学の交流の新たな中心となる。

整備にあたっては前箕面キャンパスマスタープランに詳細を記載しており、グローバルキャンパス、スマートキャンパス、サステイナブルキャンパスという3つの基本方針を立て、また箕面新キャンパス構想を策定し整備を進めてきた。ウォークアビリティに配慮したキャンパスを整備してきた。

図2.03aに伸ばすべき個性や空間像、および問題個所の読みとりを示し、継承すべき場所や風景を図2.03bに示す。

2-4. 中之島センターの個性と空間像

大阪市北区中之島4丁目地区は大阪帝国大学発祥の地であり、大阪大学医学部、歯学部および理学部がかつてあった、大阪大学にとって縁の深い場所である。その跡地に大阪大学は中之島センターを開設し、社会学連携活動の拠点としている。大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業の一環として、機能強化のための改修工事を行い、2023年4月にリニューアルオープンした。

図2.04aに伸ばすべき個性や空間像、および問題個所の読みとりを示し、継承すべき場所や風景を図2.04bに示す。

4. 石橋口

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・大阪大学会館がアイストップとなり、庭園、待兼山の緑が目に入るロケーションで、中山池も近い。
 - ・平成17年整備以前は、警備員詰所が美観を損ね、案内表示もなかった。
- 整備成果
 - ・平成17年に石橋口の警備員詰所、案内サイン等が整備された。
- 残された課題
 - ・庭園の景観が十分に活かされているとは言えない。
- 整備方針
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・過去に設置されたサイン・看板が整理されず景観を損ねている箇所がある。

3. 阪大坂

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・湾曲した坂道は、ドラマチックなアプローチとなりうる。
 - ・中山池越しに大阪大学会館までの眺望が得られる。
 - ・平成17年整備以前は駐輪が多く、自転車が坂を駆け下り大変危険で、貧弱な公道のようだった。
- 整備成果
 - ・歩行者アプローチとして魅力ある整備がされた。
 - ・平成18年の自転車通行禁止措置により、歩行者の安全性が高められた。
 - ・平成22年度に中山池周辺が整備された。
- 残された課題
 - ・緑陰が少なく、夏期の舗装の照り返しが厳しい。
- 整備方針
 - ・歩行者アプローチとしてより一層魅力的にする。
 - ・交通安全対策検討を継続的に行う。
 - ・緑陰（並木）の形成を検討する。

2. 阪大坂下

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・背景に待兼山の豊かな緑を持ち大学の顔となる位置。
 - ・平成17年整備以前は、貧弱な公道のようだった。
- 整備成果
 - ・阪大の顔として広がりある空間に整備された。
 - ・歩行者アプローチとしての整備がされた。
 - ・大規模な駐輪場が整備された。
- 残された課題
 - ・緑陰が少なく、夏期の舗装の照り返しが厳しい。
 - ・小舗石舗装の歩行感が悪く、バリアフリー性に難がある。
 - ・駐輪場が一部荒れている。
- 整備方針
 - ・歩行者アプローチとしてより一層魅力的にする。
 - ・緑陰をとり入れ、舗装の歩行感、バリアフリー性を改善する。
 - ・駐輪場のさらなる有効活用を図る。
 - ・総合学術博物館と駐輪場の一体的計画を行う。

1. 待兼山

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・豊かな里山の景観を良く残している。
 - ・阪大生の主たる歩行者アプローチに近接。
 - ・平成17年以前は、旧区画の建物と敷地が、十分に整備・活用されていなかった。
- 整備成果
 - ・修学館（総合学術博物館）が、元々の建築意匠を活かし、景観に溶け込むように整備された。
- 残された課題
 - ・里山としての保全方法に課題がある。
- 整備方針
 - ・里山を保全しながら博物館との一体的計画を行う。

6. 共通教育メインストリート周辺（コミュニティゾーン）

- ポテンシャル
 - ・歩行者空間らしい整備がなされ銀杏並木が美しい。
 - ・浪高庭園など、豊かな緑に囲まれている。
 - ・共通教育メインストリートとして歩行者分離が図られ、美しく整備されている。
- 現状の問題
 - ・駐輪が非常に多く、見苦しい上、歩きにくい。
 - ・浪高庭園は樹木が茂りすぎて陰鬱な重たい空間となっており、休憩に利用する人も少ない。
 - ・中央の街路と建物との間の空間が有効に使われていない。特に言語文化研究科北側の植栽は剪定が行き届かず閉鎖的な空間となっている。
- 整備方針
 - ・駐輪場を整備する。
 - ・中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよい街路として整備。
 - ・上記に伴い、浪高庭園は豊かな緑を活かしながら、くつろぎやすい空間に広がり見通しの良さを持った庭園として整備する。
 - ・言語文化研究科北側の樹林地は、適切な剪定を行い、くつろぐことができる開かれた空間として整備する。

5. 大阪大学会館周辺

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・キャンパス内で最も歴史ある建物であり、丘の上でランドマークとなっている。
 - ・中山池とセットで、阪大坂方向からの眺望の重要な要素となっている。
 - ・平成23年（80周年）整備以前は、イ号館（現大阪大学会館）の全学利用が少なく、また学生交流棟北側も仮設駐車場に利用され、水辺の快適性が活かされていなかった。
- 整備成果
 - ・80周年記念事業により、大阪大学会館が建築意匠を保ちながら改修され、同時にバリアフリー対応の屋外エレベーターが設置されたほか、学生交流棟の北側にあるキャンパスの中心的位置づけとなる親水空間としての広場等も新たに整備された。
- 整備方針
 - ・広場や周辺の、緑の維持管理を徹底する。

11. 福利ゾーン

- ポテンシャル
 - ・人の賑わいのある空間で、文法経講義棟西側など、ゆとりがある。
- 現状の問題
 - ・十分に歩行者分離が図られず、縦列駐車が頻り、放置車
- 整備方針
 - ・可能な限り歩行者街路と高めるが、重要な車動線歩行者分離を徹底する。

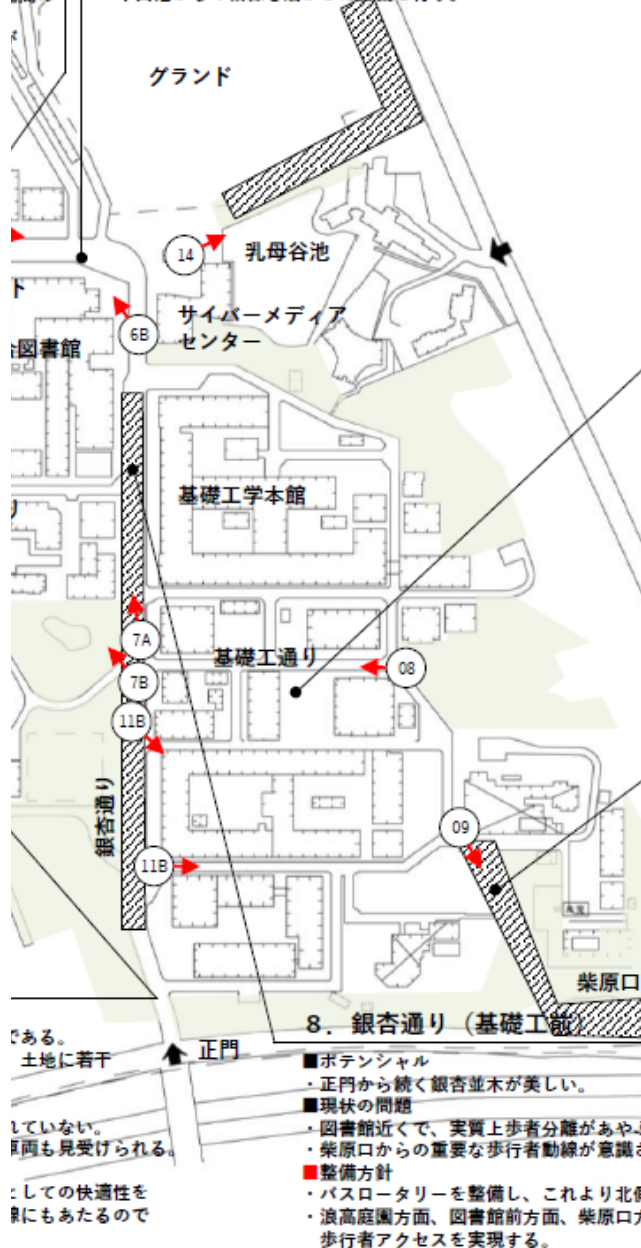
図 2.01a 伸ばすべき個性・空間資源および問題個所の読みとり（豊中キャンパス）

7. 総合図書館・サイバーメディアセンター周辺

- ポテンシャル
 - ・最重要な交通結節点であり、銀杏通り、全学教育推進機構方面、グラウンド・東口方面へと動線・景観の繋がりを持っている。
 - ・総合図書館と食堂によって人の活気のある場所である。
 - ・総合図書館、サイバーメディアセンターがそれぞれ、現代的で美しいファサードを持っている。
 - ・乳母谷池が近接し、景観上取り込むことが可能。
- 現状の問題
 - ・バスがここで転回し大変危険な状況にある。他にも一般車両と人との動線交錯が著しく、危険。
- 整備方針
 - ・歩行者専用化し、大阪大学会館前と対をなすシンボリック空間として整備する。
 - ・乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も活かした整備を行う。

凡例

- 快適な歩行者空間または広場
- 緑地
- ランドマーク的要素
- 01 次頁写真キープラン



9. 基礎工学棟文理融合型研究棟周辺

- ポテンシャル
 - ・歩行者動線上、柴原口と銀杏通りを結ぶ重要な位置。
 - ・西向きに見ると、らふおれ（食堂）や待兼池周辺がアイストップ的位置を占める。また柴原口から北向きには、基礎工学研究科新館が美しく見える。
 - ・待兼池周辺は、空間的に比較的開けている。
- 現状の問題
 - ・主要な歩行者動線なのに、車のための道の様相。
 - ・建物が建て詰まっていて交通動線の整備が不十分。
- 整備方針
 - ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成。
 - ・理学J棟北側～柴原口は歩行者優先を強化する。
 - ・可能な限り緑地、広場化を図る。
 - ・将来計画建物が歩行者街路・広場に悪影響を及ぼさないようにする。
 - ・待兼池周辺の空間の広がりを保全し、活かす。

10. 柴原口周辺

- ポテンシャルと、従前の問題
 - ・理学E棟以南では、歩行者専用の小径になっており、草が刈られた状態では静かで快適な、比較的行き通しの良い歩行者空間になっている。
 - ・平成24年整備以前は、貧弱な裏口であり、隣接する駐輪場跡地も管理が行き届かず景観を損ねていた。
- 整備成果
 - ・新柴原口が快適な歩行者用の入口として整備された。
- 残された課題
 - ・主要な歩行者動線としては有効幅員が全体に狭く、かつ空間の広がりにもネック部分がある。
- 整備方針
 - ・主要な歩行者経路として快適な街路を拡張・形成する。
 - ・豊中キャンパス全体の将来の建替え更新を考慮しエリア全体の再編を検討する。

8. 銀杏通り（基礎工前）

- ポテンシャル
 - ・正門から続く銀杏並木が美しい。
- 現状の問題
 - ・図書館近くで、実質上歩行者分離があやふやである。
 - ・柴原口からの重要な歩行者動線が意識されていない。
- 整備方針
 - ・バスロータリーを整備し、これより北側では歩行者専用空間としての整備を行う。
 - ・浪高庭園方面、図書館前方面、柴原口方面、福利ゾーン方面、それぞれへの快適な歩行者アクセスを実現する。



01 総合学術博物館(修学館)前の門周辺
豊かな緑が背景となっており大学の顔となるべき場所



02A 阪大坂
湾曲した坂は、ドラマチックなアプローチとなりうる



02B 中山池堤防から大阪大学会館方面をみる
中山池と大阪大学会館が一体となって景観を形成している



03 石橋口
記念庭園と一体で整備されている



04 大阪大学会館
メインストリートからもランドマークとして見える



05A 共通教育メインストリート(コミュニティゾーン)
歩行者専用空間として美しく整備されている



05B 浪高庭園
豊かな緑を持ちキャンパスに潤いを与えているが、やや閉鎖的



06A 総合図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある



06B 総合図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある



07A 銀杏通り周辺
歩車分離され、並木と共に美しく整備されている



07B 銀杏通り(待兼池)
オープンスペースが整備されている



08 基礎工学 J 棟周辺
建物が建て詰まっていて交通動線の整備が不十分



09 柴原口
草が刈られた状態では、静かで快適な空間



10 福利ゾーン
賑わいがある空間だが、歩車分離が不十分



11A 理系ゾーン
現代的な統一のイメージを前面に出している



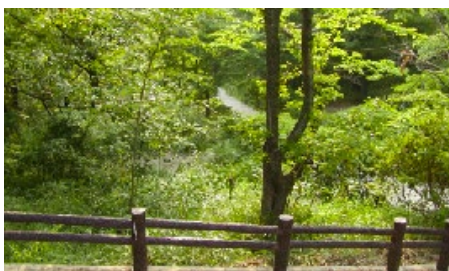
11B 理系ゾーン
高密度な土地利用がなされている



12A 文系ゾーン
建物の入り口が街路からの引きを多くとっている



12B 文系ゾーン
緑が多く、歩行者専用空間を多く持つ



13 待兼谷
緑豊かな里山の景観を良く残している



14 乳母谷池・東口
豊かな緑が感じられる歩行者用の入口

2. 6

図 2.01b 継承すべき場所や風景と問題箇所（豊中キャンパス）

5. 里山と犬飼池

■ポテンシャル

- ・キャンパス中央に広がる里山と犬飼池の自然は、キャンパスの重要な財産である。

■現状の問題

- ・アクセシビリティが低く、今ある散策路も利用度合いは高くない。
- ・調整池周辺などは雑草が生い茂り、景観を損ねている部分がある。

■整備方針

- ・里山と犬飼池およびその周辺を、自然公園として整備し、大学関係者だけでなく、周辺住民も気軽に訪れられる憩いの場所として整備する。

4. 北門周辺

■ポテンシャル

- ・キャンパス北側に繋がる門であり、歩行者・自転車の通路となっている。
- ・周辺建物や貯水池周辺の整備との相乗効果で、景観を向上させることができる。

■現状の問題

- ・利用者が少なく、店舗を誘致してのアメニティの充実などの見通しは立っていない。

■整備方針

- ・福利課外施設の方針に照らして検討を進める。

3. キャンパスエッジの緑地帯

■ポテンシャル

- ・キャンパスを取り囲むように広がる緑地帯は、キャンパスの景観を豊かなものにする重要な要素である。
- ・周辺住宅地に緑を提供すると共に、緩衝帯としても機能している。

■整備方針

- ・緑地帯に対する意識を高め、積極的に保全に努める。

1. 千里門キャンパスエッジ

■ポテンシャルと、従前の問題

- ・北千里方面におけるキャンパスの顔である。
- ・周辺建物整備との相乗効果で、飛躍的な景観向上を図ることができる。
- ・千里北公園の池と緑が隣接している。
- ・平成17年の整備以前は、調整池が見苦しく、自転車・バイクの溢れ出しも大変多かった。

■整備成果

- ・微研やウエストフロントなどの整備が進み、現代的な景観が形成されつつある。

6. モノレール下キャンパス

■ポテンシャルと従前の課題

- ・モノレール駅下から南に広がる広大大きく左右する、重要なキャンパス
- ・周辺住民の生活環境に与える影響も
- ・病院再開発時に貴重な空間となる。

■整備方針

- ・キャンパス内外の景観に配慮した整
- ・斜面地を活かした整備を行う。
- ・病院ゾーンの建物ボリュームが極め緩衝緑地としての機能を保全する。

図 2.02a 伸ばすべき個性・空間資源および問題個所の読みとり（吹田キャンパス）

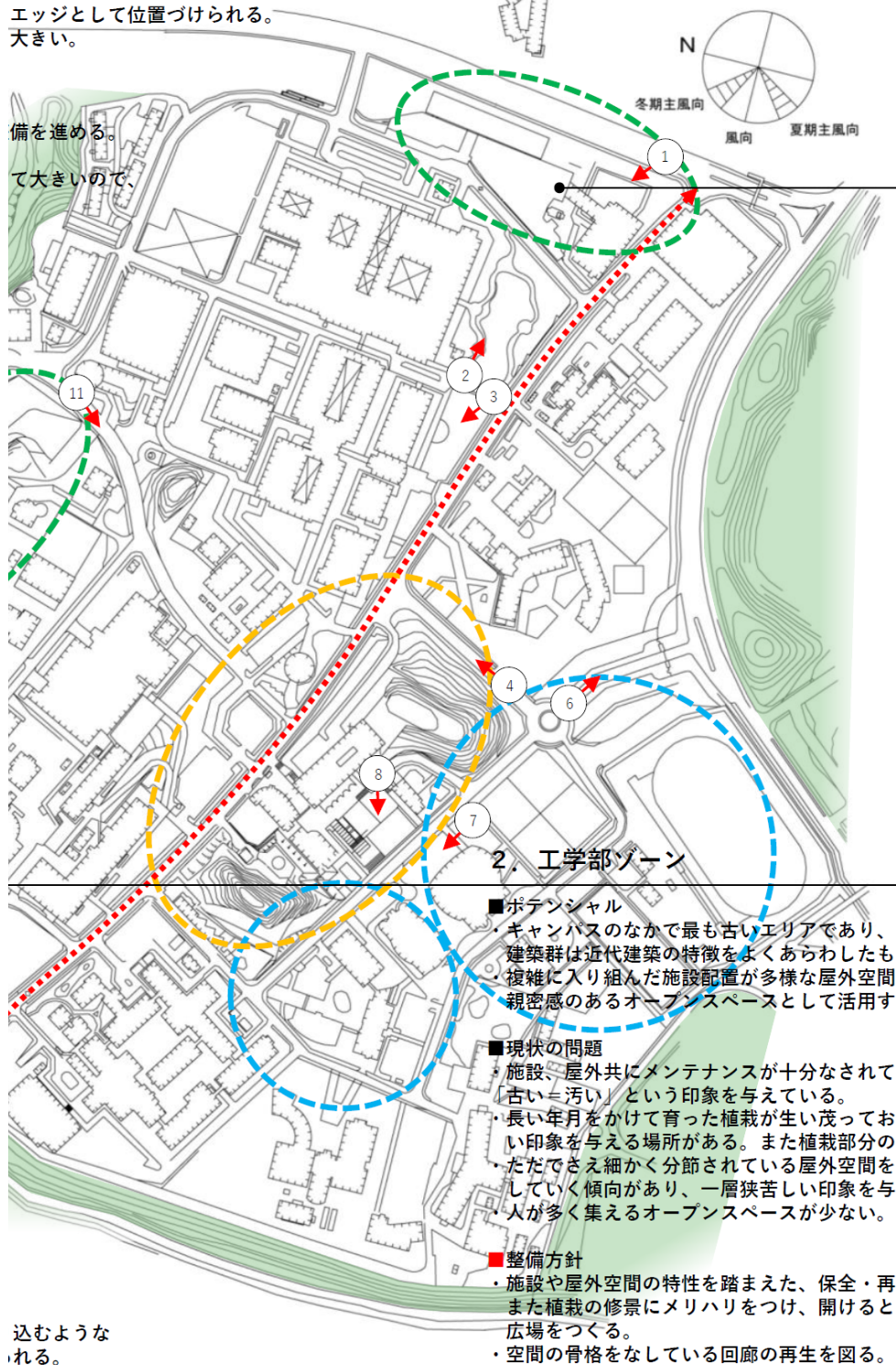
エッジ

な窪地は、キャンパスの印象をエッジとして位置づけられる。大きい。

■整備成果

- ・病院の再開発計画に伴い、駐車場および立駐を整備した。

備を進める。
て大きいので、



2. 工学部ゾーン

■ポテンシャル

- ・キャンパスのなかで最も古いエリアであり、時代を感じさせる建築群は近代建築の特徴をよくあらわしたものである。
- ・複雑に入り組んだ施設配置が多様な屋外空間を形成しており、親密感のあるオープンスペースとして活用することができる。

■現状の問題

- ・施設・屋外共にメンテナンスが十分なされておらず、「古い＝汚い」という印象を与えている。
- ・長い年月をかけて育った植栽が生い茂っており、薄暗く入りにくい印象を与える場所がある。また植栽部分の整備も十分でない。
- ・ただでさえ細かく分節されている屋外空間を、更に植栽で遮断していく傾向があり、一層狭苦しい印象を与えている。
- ・人が多く集えるオープンスペースが少ない。

■整備方針

- ・施設や屋外空間の特性を踏まえた、保全・再生活用を進める。また植栽の修景にメリハリをつけ、開けるところは大きく開けて広場をつくる。
- ・空間の骨格をなしている回廊の再生を図る。

込むような
れる。

8. 中央通り

■ポテンシャル

- ・キャンパス中央を貫く直線道路である
- ・医学部・医学系研究科、人間科学研究所、大阪大学本部、歯学部・歯学研究科、工学部・工学研究科に面する。
- ・公共バスの停留所、ロータリーがある。
- ・並木、後背面の緑がほぼ連続しており、施設の壁面後退が大きくとられている箇所が多い。

■現状の問題

- ・並木は連続しているが、後背面の整備状況が場所によってバラバラで、全体の統一感に欠ける。
- ・場所によっては廃棄物置場のバラック的建物や設備機器が道路沿いに見えたり、整備の十分でない広場・空地などがあって景観を損ねている。
- ・交差点のバンプなど、機能優先で景観に配慮されていないイメージがある。

■整備方針

- ・メインストリート、シンボルストリートとして、景観や歩行者のアメニティに配慮した整備推進を図る。

1 1. 大阪大学本部棟周り

■ポテンシャルと、従前の課題

- ・大阪大学本部棟やバスロータリー、本部前福利会館、またコンベンションセンターや体育館など、機能・交通・アメニティ、交流といった諸活動の、あらゆる面での中核施設が集中している。
- ・大阪大学本部棟が建つ里山を始め、東西通りの並木やコンベンション前の芝生広場など、緑にも恵まれている。
- ・平成18年整備以前は、植栽が空間を分断していたり維持管理が行き届かないなど、中核施設が集中しているのに求心性が低い空間であった。

■整備成果

- ・大阪大学本部棟南側は、キャンパスの中心的な広場として整備されている。

■残された課題

- ・本部南側広場と、中央通り側との接続が悪く、まだ充分整備されていない。

■整備方針

- ・吹田キャンパスのシンボル空間として、コンベンションセンターからバス停にかけての軸を活かし、旧新生があり、魅力あるセンターを、継続的に創出していく。

1 0. キャンパス南西部

■ポテンシャル

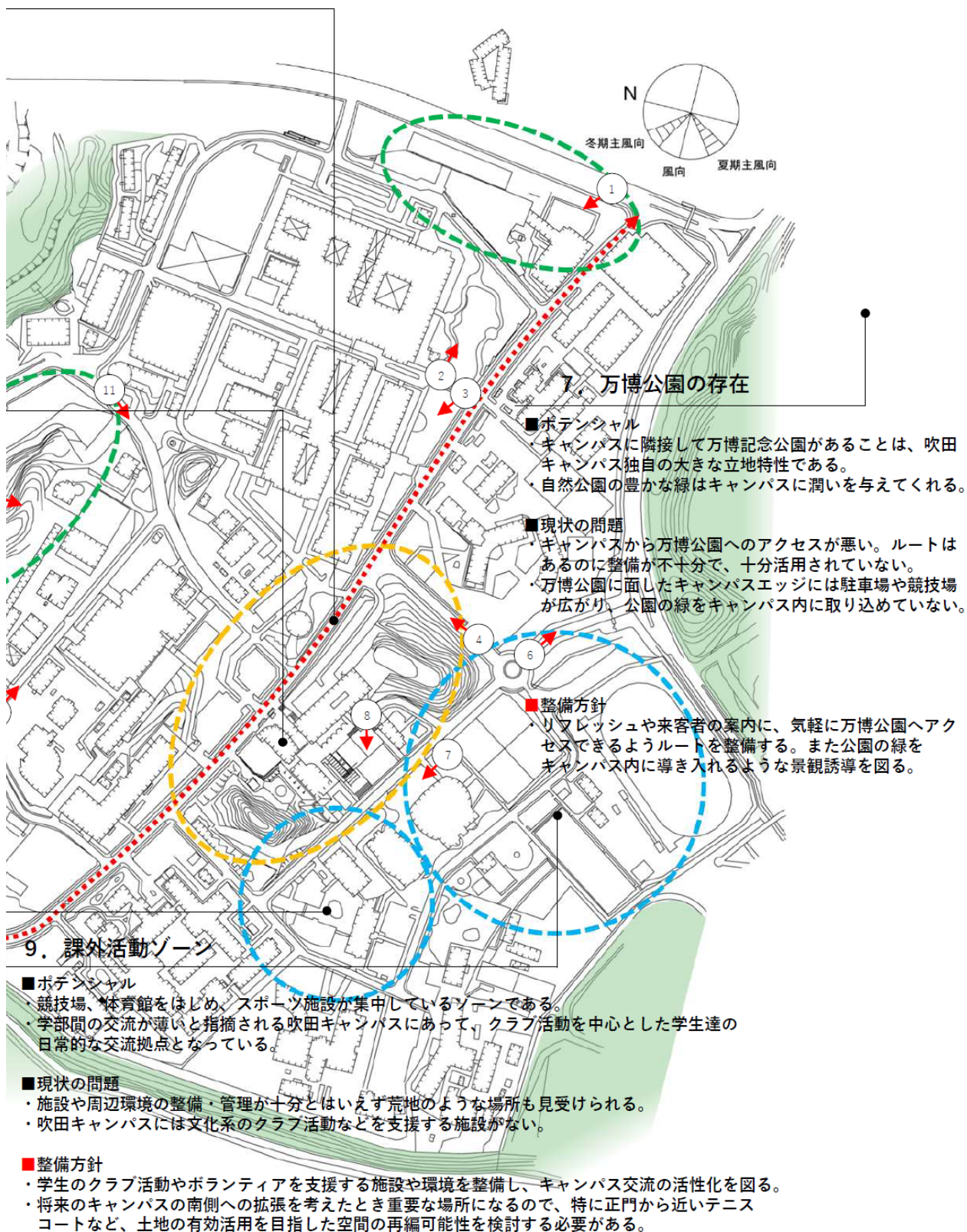
- ・隣棟間隔がゆったり大きく取られ、キャンパスらしい広々としたオープンスペースが確保できる。

■現状の問題

- ・ゾーン全体としては整備途上の感が強く、キャンパスとしての統一感に欠ける。
- ・屋外空間はオープンスペースというより残余空間という印象で、空地は駐車場となっている。

■整備方針

- ・ゾーン全体を機能的、かつデザイン的にも統合するような施設計画を行い、併せて周辺環境の整備を図る。





1 医学部附属病院
高層棟は周辺地域のランドマークとなっている



2 ホスピタルパーク
患者の憩いの空間として活用されている



3 医学部校舎と芝生広場
古典的なデザインと芝生広場のキャンパスらしい景観



4 生命科学図書館
正門からのアプローチのアイストップとなっている



5 中央通り
豊かな緑に囲まれたシンボルロード



6 正門アプローチ
常に手入れが行き届き、特別な場所となっている



7 コンベンションセンター・体育館前
心地よい広場空間は人気の高いエリアである



8 大阪大学本部棟南側広場
キャンパスの中心的な広場として整備されている



9 犬飼池の眺め
里山と池、工学部のモダニズム建築が生み出す景観



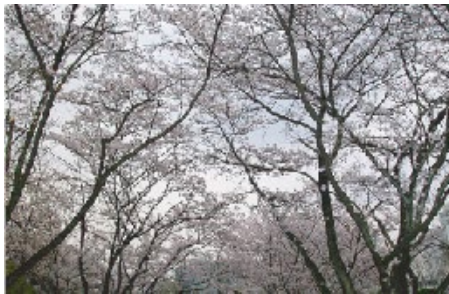
10 里山の散策路
キャンパス中央に残された自然



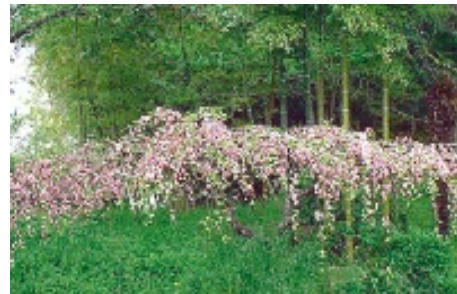
11 銀杏会館前
植栽で修景された法面が緑の壁をつくっている



12 けやき通り
春には桜の並木道となる



13 楠本会館周辺の桜
隠れた花見の名所



14 微研駐車場付近のしだれ桜
キャンパス内にはいくつかの桜の名所がある



15 さくら環状通りの植栽
(アジサイ)
自主的に植えられた様々な
草花が、法面を彩っている



16 西門アプローチ
緑のトンネルを上っていくようなアプローチ



17 工学部広場
工学部エリアでは最も賑わう場所である



18 工学U1M棟(GSE 高層棟)
高層棟はキャンパス西部のランドマークである



19 産業科学研究所アプローチ周辺
緑と広がりのあるオープンスペースをもっている



20 工学部中庭
人々に安らぎの景観を与えている

4. 北側街路

- ポテンシャルと残された課題
- ・1Fのエントランス前の街路であり、隣接する学寮との主動線である。
- ・道路際には学内連絡バスのバス停が設置されており、他キャンパスとの移動の際の動線ともなっている。
- ・昼食時にキッチンカーの出店なども行っており、今後益々活性化が期待される。

3. 大阪船場繊維卸商団地協同組合との連携

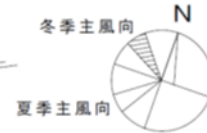
- ポテンシャルと残された課題
- ・箕面キャンパスが位置する船場東の地区においては、大阪船場繊維卸商団地協同組合や組合員企業が多くの不動産を有しておられる。
- ・一方で街全体が開設50年を過ぎてまちづくりの新たなステージに入っており、「[COM GARDEN CITY]構想」を打ち出されている。
- ・本学もすでに一部の機能がCOM3号館にも入っており、様々な連携が広がっている。

2. 北西デッキ通路

- ポテンシャルと残された課題
- ・北側街区への接続通路として途中までを整備。
- ・北側街区開発時に道路をまたいだ通路が整備されることとなり、それまでは行き止まりとなるため安全上通行止めになっている。
- 整備方針
- ・北側街区への延長工事は本学整備部分ではないため、箕面市および大阪船場繊維卸商団地協同組合と引き続き連携をして整備を進め、地域の回遊性・ウォークアビリティを高める。

1. 阪大広場

- ポテンシャルと残された課題
- ・さらなる活用と地域との連携の発展。
- ・新駅開業に伴う人流の変化への対応。



5. シンボル広場

- ポテンシャルと残された課題
- ・研究講義棟と学寮との間に位置する広場であり、南側の駐輪場・バイク置き場への動線にもなっている。
- ・夏祭りなどのイベント的な出店を想定しており、今後益々の活用が期待される。
- ・将来的には箕面キャンパスとしての増築をする場合の候補地となっている。

6. 3Fピロティ空間

- ポテンシャルと残された課題
- ・大きな屋根付きの空間として、箕面キャンパスの象徴的な空間となっている。
- ・普段は昼食や休憩、学習等にも活用され、イベント時には南側の阪大広場と連動した有効活用がなされている。
- ・3Fの建物内の店舗や市民連携機能との接続部分でもあり、この空間を開けず、オープンな形でうまく連携して活用していくことが重要である。

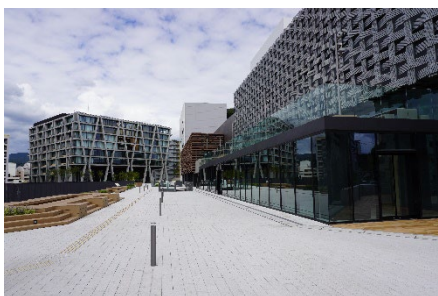
7. 図書館と生涯学習センター

- ポテンシャルと残された課題
- ・国立大学が市立図書館と生涯学習センターを指定管理で運用し、特に図書館は大学図書館との境目のない合築となっている全国唯一の図書館である。
- ・ここを活用した地域住民との連携が箕面キャンパスの特色の一つとなっている。
- ・大学図書館でありながら市立の公立図書館であるという特色を活かし、空間ごと教育・研究により積極的に活用していくことが重要である。

8. 北大阪急行線との接続

- ポテンシャルと残された課題
- ・2024年3月に、3年延期されていた北大阪急行線の延伸がなされ、改札階からデッキまで直接接続するエレベーター・エスカレーターがある。これによりキャンパスへのアクセスは格段向上した。
- ・新駅開業に伴う人流の変化への対応。

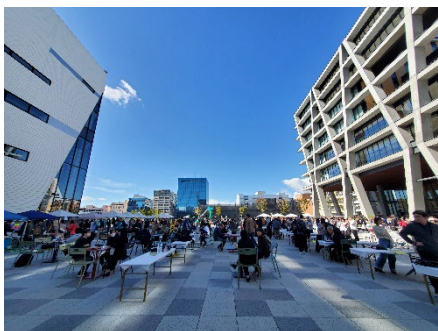
図 2.03a 伸ばすべき個性・空間資源および問題個所の読みとり（箕面キャンパス）



01 ペDESTロイANDデッキ。駅からキャンパスまでのメイン動線



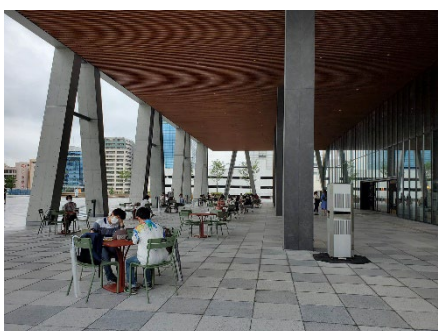
02 阪大広場よりキャンパス3F 入口



03 阪大広場。箕面市エリア部分と連動した活用が図られ様々なイベントが実施されている。



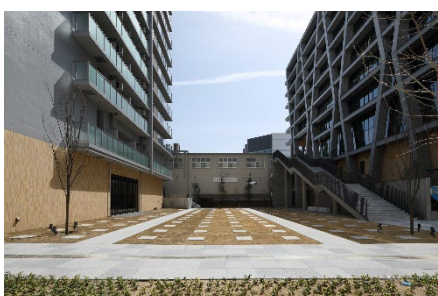
04 北側道路。夏祭りの時は歩行者天国になる。



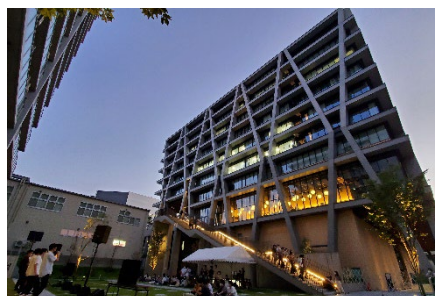
05 3F ピロティ。食事や学習など多様な利用がなされている。



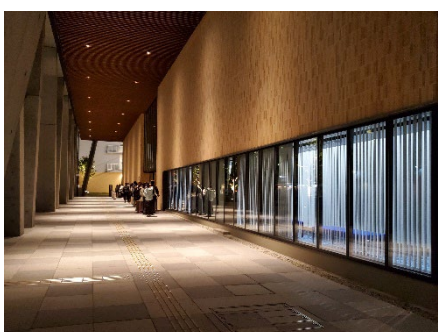
06 3F ピロティ。夜間も照明があり利用できる。



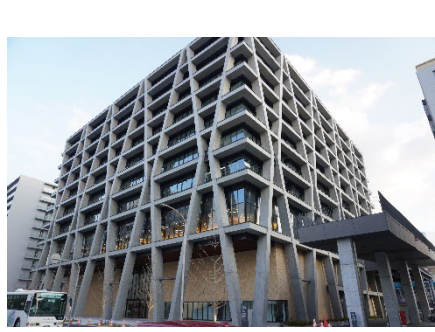
07 シンボル広場。研究講義棟と学寮との間にあり、階段下から駐輪場・バイク置き場へ抜ける動線がある。



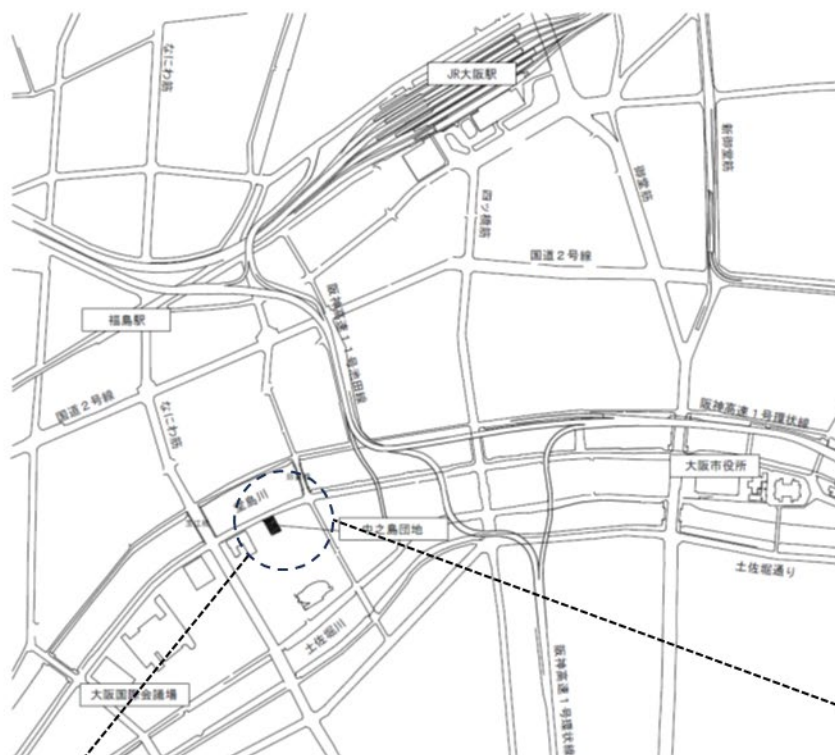
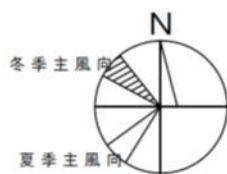
08 シンボル広場。イベント時はここも会場として使われることがある。



09 1F 北側エントランス。学内連絡バスを待つ学生列をなす。



10 北西デッキ(写真右側) 将来の接続を待つ



1. 正面玄関周辺

- ポテンシャルと残された課題
- ・1Fのエントランスは来訪者の主動線であり、車での利用や、大規模セミナー等の際は大人数の出入りがある。
- ・一方で前面の道路は交通量も多い。

2. 南側2Fのデッキ接続

- ポテンシャルと残された課題
- ・南側は未来医療国際拠点「Nakanoshima Cross」や大阪中之島美術館とデッキで接続されており、回遊性を高めている。

3. 新駅の開業

- ポテンシャルと残された課題
- ・2031年春開業目標でなにわ筋線(仮称)中之島駅が西側に開業する予定で、将来的には交通の便の改善が期待されている。

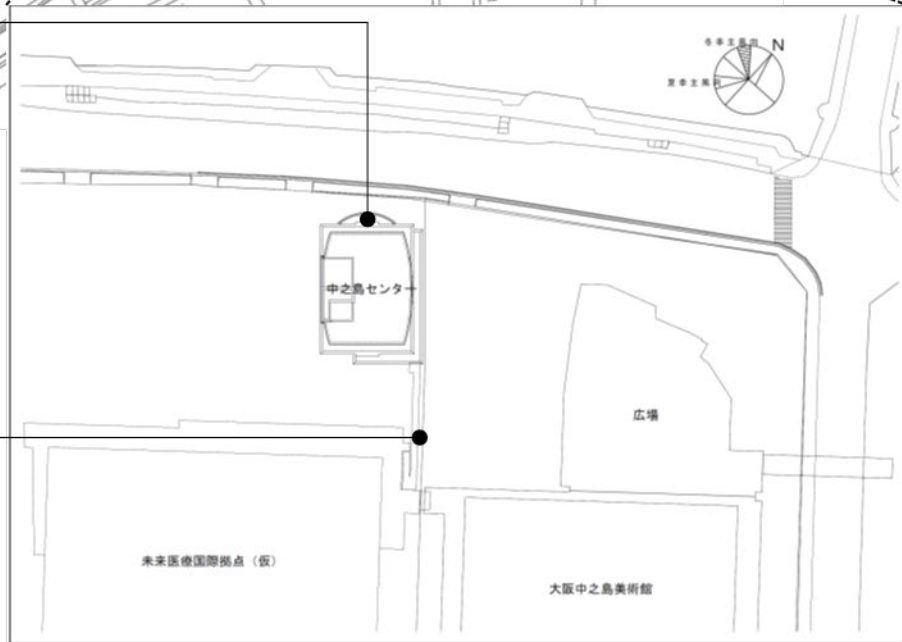


図 2. 04a 伸ばすべき個性・空間資源および問題個所の読みとり(中之島センター)



01 正面玄関(北東より)



02 正面玄関(北西より)。車寄せも兼ねて



03 建物横には南北を繋ぐ通路がある。



04 建物外観。奥(南側)に見える未来医療国際拠点や大阪中ノ島美術館と2F デッキで接続している。

図 2. 04b 継承すべき場所や風景（中之島センター）

Yale University

イエール大学のキャンパス環境整備は、「フレームワークプラン」と呼ばれるキャンパスデザインの考え方の「集成」に基づき進められている。例えば、キャンパス内の街路の分析に基づき、にぎわいを維持・継承すべきと判断される街路については、これに面する建物の1階にカフェ、レストラン、花屋などの店舗が設けられるとともに、建物の壁面の位置を歩道側に揃えてヨーロッパ旧市街のような親密な街路空間を形成するためのルールが共有されている。オープンスペースについては、広場や緑地、歩行者路が連結された大きな空間軸が定められているため、建物が更新されてもキャンパスの個性が継承されるようなしくみが確立されている。

建物のデザインはその都度デザインアドバイザー委員会で議論される。委員会には多様な立場の関係者に加え、現建築学部長と元建築学部長が参加する。これは、フレームワークプランの理念を人から人へと議論を通して受け継ぐためである。建築デザインは固定化されたものではなく、時代が進めばデザインの作法や技術も常に進化している。フレームワークプランで共有されるキャンパス環境の普遍的「骨格」を守り育成するような、その時代の最善の建築デザインが見出されていく。

欧米や日本では、右肩上がりの時代に、豪華な建築群を描いた「完成予想図」に象徴されるプロジェクト型の「マスタープラン」が流行した。しかし、経済が弱体化するとプロジェクトは中止となり、マスタープランはいつまでも着手されず陳腐化するという事態に陥った。一方、フレームワークプランとは、時代を超えて共有される地域環境資源や課題の読みとり方、デザインの考え方を示すものであり、プロジェクトの規模や時期に左右されることなく、小さな改善から大きな建設まで、すべての環境整備に適用できるものである。

イエール大学のフレームワークプランは常に加筆されている。新たな課題に直面するたび、最善の人々による最善の議論が新たなルールやガイドラインを生み出していくからである。このような柔軟性を兼ね備えていることも、プランが長く支持される要因となっている。

大阪大学のマスタープランは、過去の固定化されたプロジェクト型マスタープランではなく、イエール大学のフレームワークプランのような、ガイドライン型の柔軟なマスタープランを目指している。適切な運用を進めるためには、専門家を交えた多様な人々による議論を通して、理念が継承され発展されるしくみの確立が望まれる。



図 c2a 緑の空間軸の継承



図 c2b 広場と緑地の継承



図 c2c 街路に開かれたショップの誘導



図 c2d 街路に沿った壁面線の継承